

プリユウドム

ポアンカレ

これは一九〇九年一月二十八日。著者がアカデミー・フランセエズへ入会したときの入会演説である。因に、アカデミー入会演説には前任者の功績をたたえるのが慣例になっている。

諸君、

慣例によりますと、新たに入会した会員は入会演説の冒頭に於て、自分がこいねがっていた名誉を今さらのように驚いて、諸君の期待がどれほど謬あやまっていたかを説明するのにこれつとめるように思われます。これは、時によつては甚だ困ることであるに相違ありません。幸にして私の場合は至極簡単です。私は、諸君がいまなお忠実に守つておられる伝統のおかげを蒙つたのです。私に諸君のお仲間入りをさしてくれたのは、幾多の、ダランベール d'Alembert や ベルトラン Bertrand や、パストウル Pasteur たちの功績です。私はそのことを知っております。そして誰もがそのことを知っております。だから私はすっかり贅言ぜいげんを省きまして、躊躇することなく、この高貴な姿のそばに近づくことができます。私はこの故人のあとをついで再び故人を世に生かさなければならぬのですが、この使命は私の心を躍らせると同時に、私はこの重大な使命に打ちひしがれるように感ずるのであります。

シュリイ・プリユウドムについてお話しするにあたって、私が先まず第一に申し上げたいのは、詩人として

の彼でもなく、哲学者としての彼でもなくて、人間としての彼であります。何故なら人間としての彼こそは、詩人として又哲学者としての彼を、同時に私たちに知らしめるからです。

人間としての彼を知るために、私たちは、彼の友人たちの証言や、この詩人の魂をすっかりその中にうたつてある詩だけをもっているではありません。私たちは、彼が十八歳のときに自分で書きつけておいたもので、その後一般には公表されなかつたところの感想録をもっているのです。この感想録の中にはどんなことが書いてあるのでしょうか？

『人が幸福であるのは、その人の生存のしかたによるのではなくて、その人の感じかたによるのである。だが人が偉大であるのは、その人が幸福であるがためではなくて、その人の思想による。偉大であるよりも幸福であるのが、より価値あるであろうか？……お吾々をして享樂を断たしめよ、しかれども苦難を絶たしむるなかれ。如何に、幸福な人が苦しみを知る人よりも劣っていることぞ。吾々は、兵士が、彼の胸間を飾る負傷を名譽とするように、あくまでも苦しむことを名譽とする。』

彼の生涯は、この青年時代の信仰告白を裏切りませんでした。だからといって諸君は彼の生涯から素晴らしい話を期待してはなりません。私がそう申しますのはこの青年時代の感情が、常に眼覚めていて、彼の全生涯のどんなに小さい行為をも、この感情が黙々として支配していたからのことです。

然らばかような犠牲に対する渴望はどこから来たのでありましょうか？ シュライ・プリユウドムにあつては、一般には相排斥しあっている二つの能力が結合しています。それは精密微細な感性と、勉強明徹なる思索力とです。この二つの能力は、一つづつ孤立したものとしても平衡を保っていました。思索力は、彼を落ちついたブルジョアとしていました。盲目的感性は、彼を刺戟した対象が遠ざかるや否や眠ってしまいま

した。鋭い感性は休息ということを知りません。それは常に苦しむ機会をさがし求め、そして苦しむ機会を増やしてゆきます。そのために、絶えず新たな不安が生れて来るのです。心は懐疑的になり、何事をもこれで十分にしたとは信ぜず、満足が得られないために益々困難な行為にはしつてゆくのであります。

とは言つても誤解してはなりません。これは基督教キリスト的禁慾主義であつたのではないのです。何故なら、彼にとつては、墮落しないようにすることが問題なのであつて、人類の原罪を贖あがなうことが問題であつたのではないからです。加うるに、彼は成る程、最も難かしい活動的な試みを自分に課しました。けれども、彼は、感ずること、知ることの欲望が甚だ強く、自然の美うるわしさに非常に感謝していたので、自然が私たちに与えてくれる良きものをおしのけようなどとは夢想だもせませんでした。次の句ではじまっている詩は、このことを私たちに説明しています。

等しく強き力もて吾々を誘惑する二つのものあり。

薔薇の布団と山羊シリース毛布の毛と

あまりに心をくばる人々には苦しみの種が多いものであります。かような人々は実際の活動には適しません。木虱きじらみを踏みつぶしはしないかと心配しては、歩くことは困難です。しかもかような人々は活動に憧あれがれます。何故なら、彼等の眼には、何もしいでいることは、何もかも棄て去ることのように映ずるからです。

われ希望を失えるを誇るは

無為にして過す口実に過ぎざらん

それを恥とせずして強辯するとき

心中自らを裏切るが如き心地す

シュリイ・プリユウドムはすべての場合に真面目でありました。少年時代には生徒としての義務を真面目にはたし、後年アカデミー会員となってからはその義務を真面目にはたしました。諸君と協力した場合でもレジョン・ドヌウル勲章会議に於ても、苟くも判断を下すにあたつていつもどんなに苦しんだことでもありません。彼は、他の場合には非常に時間を惜しみましたけれども、他人から受けとつた大して急用でもない手紙に返事を書くためにでも、又人から送つて来た書類を読むためにでも、時間をおしまずに浪費しました。うるさく彼の意見を求めに來たり、彼の賞讃を期待しに來たりする、執拗な人々を体よくことわるために、彼は心胆をくだいたことでありましょう。そういう時には、相手の心を傷つけはしまいかとの心配と、嘘をいうまいとする心との間に激しい争闘が行われたのです。彼は、好意ある丁寧な態度をとることによつてすべてを調停したと幻想して巧みにこの争闘を切り抜けました。

彼はこの好意ある態度をかたく保持して皮肉な態度を禁じていました。けれども、彼は、自然な、快活な心をもつていたのであります。それは、私には、基督教のある聖者たちの心を偲ばしめるものであり、彼の友人にとつては、彼との交際をいやが上にも魅力あらしめたものです。

この二つの性質の争闘は、多くの特色を私たちに説明してくれます。彼は又とない寛大な人でありましたが、寛大ということに於てさえも、自然の跳躍のままにとめどなく寛大であつたのではなかつたのです。彼は、判官のように、一切を秤量しつくしてしまふまでは、この寛大な心の奔逸をおしかくしていたのです。彼は、むやみと抗議をしなかつたのでちよつと見たところでは冷淡なように見えたかも知れなかつたのであります。

彼を人と物とに結びつけたところの、そして彼がそれを見事に語っているところの、此の不安な同情は何であつたであろうか？

吾は凡てを愛せんとしてしかも不幸なり、

そは吾が苦しみの原因を増せばなり、

もろく、かついたましき、全宇宙の限りなき機縁は

吾が魂より森羅万象にうつりゆくなり。

私たちの心中に、苦痛の光景をよびさすものは、ほとんど肉体的なやみばかりではありませんでした。それは、何よりも先ず、私たちの感性のうちに於ける最も知的なものを憤激せしめる不正に対する反抗であつたのです。

此の内部の戦は、苦悶をともなわずにはいませんでした。彼は讚歎すべき詩の中で、『吾に信仰あり、吾に希望あり』と言う心情と『証明せよ』と答える理智との間の悲劇的対話を描きました。そして、この争闘は、彼の理性がめざめたそもその時からはじまったのです。何故なら、彼は十五の年に次のようなことを書いています。

『詩人であると同時に哲学者として生れた人は甚だ不幸である。彼は凡ての物の両面を考え、かくて彼が讚美するものの空しきをなげく。又、単に哲学者に過ぎない人も悲しむべきである。何となれば、彼は、哲学者たるがために、吾等の歓喜の源泉なる心情を犠牲にすることが屢々あるからである。けれども、若し幻想が最悪の不幸でなければ、詩人こそ幸である』。

シュリイ・プリユウドムは彼の父を知りませんでした。彼が生れて数ヶ月の後、彼の母は彼女が長く待ちわびていた幸福が消えてしまったのを見ました。

吾等は長き長き相愛の後、

ともにすまいしは束の間なりき。

この子供の第一印象は悲痛の印象でありました。そして、その^{こんせき}跟迹は、彼の心の中に長くのこっていました。

重々しく、気づかざるうちに

憂鬱は眼より心に下りゆく。

シュリイ・プリユウドム夫人は、夫と別れてから世を去るまで、一人の妹と一人の兄とともに住んでいました、この伯父は、物質的にも精神的にもこの幼き子供の後援者でありました。彼はこの子供の詩的なあぐれを解するにはふさわしい人ではなかったけれども、謹直な、すなおな、健全な常識をもった人でありました。これはリヨン地方の特色なのです。シュリイの少しく念の入りすぎた反省の習慣も、疑いもなくリヨンの先祖から受けたものでありましょう。彼の感性は、素朴な信仰家で、内心ひそかに理想主義者であった彼の母からうけたものであると彼は信じていました。

おん身吾を知らずに吾を愛されし時

わが母よ、おん身は既にややつれい給^{たま}えり

青空に浮ぶ白き島の如くにも

飛びゆく雲のそれにも似て

.....

おん身は叫びたまえり、翼、翼と

八歳の時、彼は寄宿生として或る寄宿舎へはいりました。こんなにはやくから両親の膝下をはなれたことは、彼に惨酷な思い出を遺しました。彼がこの『暗い学校』について言っていることは凡ての人が思い出すところであり、そして寄宿舎のなじめさが語られるときには、最初の孤独、Première Solitude の中の名句が凡ての人の記憶に浮んでくるのであります。

彼の性格は漸くはつきりあらわれはじめました。自分の義務をしじゅう気にしていた彼は、ちよつと叱られても、ひどくそれに敏感でありました。或る日のこと、彼がそこからボナパルト小学校へ通っていた寄宿舎で、一人の先生が、不当なことで彼を叱りました。彼はすっかり激動して母親の許へかけつけました。校長の心配も一通りでなく、折角あてにしていた成功がだめになるのじゃないかと思うと、彼の全身の繊維がふるえて来るので、早速逃げた子供のあとを追いかけてゆき、どう言つてあやまったか知らぬが、とに角一家の利益は救われたのでした。

その当時からすでにこの子供は凌辱された正義のために身をささげ、そのために復讐しようとしていました。一人の学校友達が大人に打たれたとき、シュリイはその子供に言いました。『君は君が打たれた人を打ち返してやらねばならぬ』。その翌日、打たれた子供は、慄えながら、しかしきつぱりと決心して、真直に敵の方へ進んでゆきました。彼は、自分の大胆さの結果を、不安を抱きながら待っていると、彼の敵手はその場に倒れてしまいました。どこか遠くの方にいるものとはばかり思っていたシュリイが、エヴィラドニウ

スのように矢庭やにわにその場へ現れたのでした。彼がそこへやって来るためには、ずい分学校の規則を犯さねばなりませんでした。それは困難なことのようには思われませんでした。それだからこそ彼はそれをやるうとしたのです。彼の友達は言いました。『彼はどんなに私を愛していることだろう。けれども、彼がこのことをしたのは彼が私を愛しているからではなくて、それが正しいことだからである。』

その頃は中等学校は今日のように四科に分れていないで文科と理科との二科に分れていたのでありますが、そのうちでいずれかの科を選ばねばならぬ年齢に達したとき、シュリイは理科を選びました。彼の一家の友人の大多数はこれをきいて驚きもし、遺憾にも思いました。わけても一人の文学に通じた老裁判官は彼に対して忠告せずにはいられませんでした。彼は既に文才のあることを証拠だてていましたし、サロン向き喜劇の面白い韻文のプロログを書いたばかりでありましたが、それでも、彼は寄宿の先生の忠告に従いました。理学の研究は彼の精神に深い印刻をのこしました。彼は新しい限界が開けて来るのを見たばかりでなく、益々いい加減なことに満足できなくなって来ました。彼は真面目まじめにこの研究をなし、それに成功しました。彼が数理哲学に関する浩瀚こうかんな原稿をのこしていることを知ったらきつと驚く人があるであります。全く、彼は、私のような者がこの席へ現われるかも知れないことを前もって知ってそのつもりでいたのだとも言えましょう。

彼は砲工学校へ入学することになっていましたが、眼病のために研究を中止しなければならなくなったので、試験を受けませんでした。そこで、彼は科学研究の志をすててリヨンの両親の許へ帰り、バカロレア・エ・レトル文学士になるために準備をしました。この潔い基督教キリスト的環境の中で、彼は、神秘主義のはげしい危機、消え去らんとする信仰の最後の閃めきを経験したのであります。

だが彼はそのうちに『何かしなければ』ならなくなりました。シュナイダー氏の保護のおかげで、彼はクルウゾオの工場でちよつとした職を見出しましたが、そこには、どの程度まで自分が道に迷っていたかを知るに必要な間だけしかとどまっていなかったと彼自ら言っています。それから彼は再びパリへ来て或る公証人のところで働きはじめました。嗚呼、彼の詩人の魂が、工場でよりも、公証人の家で、より多くの満足を見出さねばならなかったのです。

公証人の書記たちは、妙な災難を蒙ることがあるように思われます。シュリイ・プリュウドムは主人からフエ氏という人に幾何かの金額を請求にやらされました。この商人は、彼の名が他日この円天井の下で響き渡るような名誉をもつてであろうというようなことは夢にも知らないで、はじめには彼を追い返そうとしましたが、遂には彼を詐欺で訴えました。そして二人の代辯人をつれて来て、彼を警察へつれてゆかせました。そこで、無実なことがわかったので原告は狼狽してしまいました。書記のシュリイは放免されて、行きがけには、不安そうな眼をして通つて来た道を、勝ちほこつて、意気揚々として帰つて来ることができましたが、これにひきかへ、フエ氏は、自分の過ちが气まりがわるく、どうしてそれを償つていいかわからないで、強情に強い酒をあおっていました。

シュリイは彼の職務に忠実にはたらかしましたが、夜の時間の一部をさいて詩を書きました。使いにやられたときは、彼はできるだけはやく用をすまして、カフエへかけつけ、そこで、コンフェランス・ラブルイエールの彼の友だちに彼の詩をよんできかせました。この人たちが熱心な彼の後援者であったことは言うまでもありません。この人たちが珍しい鳥、出版者を見出してくれたのです。またセント・ブウヴをして、この若き詩人に興味をもたせることのできたのもこの人たちのうちの一人、即ち諸君がその逝去をおしまれてい

る同僚、ガストン・パリスでありました。かくして彼の詩集スタンス・エ・ポエム、Stances et Poèmes が出版され、やがて月曜評論の批評家の賞讃的論評によりて推薦されたのです。

この成功は、あまり先見の明のなかつた人たちにも、彼がただの公証人じゃないということを証明したので、この時から彼の家族は彼を、彼の趣味のままにはしることを許しました。

読者は狂喜しました。彼等は新しい韻律を聞くことができたのです。しかもそれは、若い人々が長い間それと気づかずに探し求めていたものであったのです。そこにうたわれている声は今まで誰にも知られなかつたものでありました。シユリイ・プリユドムは何よりも先[※]ず心理学者でありました。彼が好んで描くものは、物質世界の華々しい色彩で飾られた光景ではなくて、内的生活のぼかされた色であります。魂の歎びと悲しみとであります。そして、私たちの知り得る魂は私たち自身の魂だけでありますから、彼の真の詩題は彼自身であります。それはすでにロマンチック詩人たちのうたつた詩題でもありません。けれども、彼の性格と彼の時代との間にどれ程の相違があつたかは説明するに足るのです。

ロマンチック詩人たちが彼等自身について私たちに見せるものは、彼等自身のうちにある、例外的な異常なものであります。読者はこれを読んで感動しますけれど、同時に吃驚^{びくろ}します。ところがシユリイ・プリユドムを読むと、読者は、疲れることなしに歎賞^{たんしょう}することのできる友人のような感じがするのであります。読者はそこで自分の魂によく似た魂の一層デリケートな一層高尚なのを見出すのであります。読者がそこに見出すのは、恐らく、すっかりそのままの自己ではないでしょうか、少くもそこには彼自身のうちの最もよきものが見出されるのであります。

……そこに我が生活の全部あり、

そは又汝の生活の全部なり、読者よ……

私たちの大なる悲痛は、はじめ激しい疼痛からはじまって、それが少しづつしずまり、やがて、長い悲しみとなつておわります。囚人はしまいには牢獄の恐ろしさになれて、それを退屈としか感じなくなつてしまします。

その頃吾は嗚咽したり、今吾は溜息をつく

とシュリイは赦し、Pardon の中で言いました。彼が私たちに最も好んで語るのは、嗚咽ではなくて、溜息であります。彼はおどおどした心、緩漫な無言の悩み、沈黙してはいるが決して癒することなき苦しみを歌います。嵐の荒れくるうのも偉大であります、大暴風雨のあとにつづく灰色の日のおだやかな淋しさにもすべてがたいものがあります。そしてその繊細な柔かい光りは、びみょう美妙な分析に好箇のものであります。

一八三〇年の詩人は、自己の天分に信賴して、放逸なる空想をほしいままに駆使しました。シュリイにあつては、反省の力でそれが制禦されています。彼は自分でつくり出すよりも多く観察します。彼は現実をあるがままに見たいという欲望をもち、それがこわされるのを苦しみました。此の点に於ても、彼は実証科学の精神の風靡している世紀に喜ばるべき人であつたのです。

彼はその道徳的性質に於てもロマンチック詩人と異つています。ロマンチック詩人は、自分を運命の不正の犠牲者であると感じ、そこから、雄辯な不平がひき出されたのです。シュリイは、自分が、不相応な何等かの特権に恵まれることをおそれ、その意識が、彼をたえまなく苦しめたのであります。

彼が空想に反抗したのは、単に、一種の科学的用心深さからばかりではなくて、架空の世界は彼には人間が有益に行動し、それに一身をささげるべくあまりに遠いもののように思われたからです。彼がミュッセを非常に讚美して謳っている詩を思い出されんことをのぞみます。けれどもそこで彼は、ミュッセについて行動に冷淡なることをとがめ、

旗の愛人の如く理想の愛人

ならざることをとがめているのであります。

彼は、彼がパルナシアンに負うたところのものを私たちに告げております。『私がはじめて、立派な韻文というものを学んだのはルコント・ドウ・リイルに於てである。私は、端正という一つのものによって、豊富と厳肅とが二つとも同時にあたえられていることをこの派から学んだ』要するに、彼はこの一派から、その形式の或るものを取りましたけれども、ただそれだけでした。彼等にならつて、彼は、しっかりした正確な筆で、繊細な色彩と華麗な色彩とをあわせ用い、メイソニエ及び或るオランダの画家を偲ばしめるような若干の詩をつくりました。白鳥、Cygne、太陽、Soleil、雨、Pluie等がそれであります。しかしこれ等はほんの試作でありまして、彼の性質は彼を別の方へつれていったのであります。

彼はヴィニイに比較されます。そしてこの比較は正当であります。二人とも詩人であると同時に思想家です。二人とも宇宙の不完全を苦しみました。けれども、貴族が何よりも先ず、世界の俗悪なるものを嫌悪するに反し、彼の時代のデモクラシイのいぶきを受けたシュリイは、何よりも先ず不正に對して憤激しました。しかもなお、ヴィニイの思想は彼に直接の影響を及ぼしたもののようには思われません。そして、二

人の類似は暗合であるように思われます。しかも、この類似は、彼の詩に、深みよりもむしろやさしみを味うはじめての読者には気がつかれぬに相違ありません。

彼の靈感の源泉は何であつたでしょうか？ 彼は、彼自身、試練、*Épreuves* という詩の四つの部章に与えた表題によりて夫を私たちに知らせました。愛と疑いと夢想と行動とがそれでありす。

先ず第一は愛であります。何故なら、常に詩人たちを泣かせ、歌わせたものは女であるからであります。シュリーの少年時代に、非常に素朴な、けれども非常に物悲しい、彼の心を千々に碎かしめた物語があることは人の知るところであります。私はその中で彼が語っているのは彼自身のことであるかどうかは知りたいたと思いません。人には、大事にしておくのにふさわしい秘密があるものです。私は、此の詩は彼が人に知らせたくない秘密を諸君に語っているのであつた方がすきです。その女はまだ子供でありました。きっとそれは従妹であつたに相違ありません。

夫人よ君は幼なかりき

吾は十二の年なりき

あまりに早く詩人なりし吾は

あまりに早く美しかりし君が足を熱愛しぬ

君は吾に

頭を垂れたまえり

彼が小学校へやられて、彼女と遠ざかった時、彼の情熱は益々高まり、彼は最も美わしき献身的な愛を夢

みたのであります。

その頃吾が最高の理想は

愛し且つ愛さるる

無上の幸福にはあらずして

愛のために毅然として死することなりき

しかもそれは子供心の冗戯ではなくて、全生涯を通じてこの思い出は消え去らなかつたに相違ないのであります。

このことを思えば吾は、今も小児にかえるなれ

ついでこの若い少女は、心すすまずも結婚する年となりました。そして幼な友達に、やさしい別れの言葉をのこして去つてゆきました。幼な友だちのシユリイは彼女が心すすんで嫁いでいったものと信じていたのです。

吾を愛しもせで、などか、

吾を微笑ませたまうや？

それから喪がはじまりました。しかもそれは生ける人の喪ですから一層惨酷なものであったのです。

汝は恐らく彼女を死せりと思うならん

否、吾、彼女を失いし日に

吾は遠くに柩も見ず

軒に黒布の張られたるも見ざりき

しかも吾は永久に彼女を失いぬ

つきせぬ別れの言葉のうちに。

おお、双の眼を閉じもせで

埋もれもはてぬ死せる君よ。

それ以来、彼には人生は目的のないもののように見えました。陶酔から醒めて、疑いふかくなった彼には、疑いに毒された幸福しか知ることができませんでした。しかもそれには、前もつて不吉な喪章がついているのです。ちようど、生れたばかりの、病身な、死にささげられた子供のように。

ああそはついに習性ならわしとなりぬ

汝知ることのあまりに遅かりき、

疑いは苦しきものにて

一度び生れし限り不滅なることを！

この幸福は、ちよつとした音にもそこなわれるものであったので、それには殆んど墓場の沈黙が必要でありました。

しづかに愛せん、暗き夜となり

青白き炬火たいまつの光は絶え、

吾等墓場にある

思いぞすなり。

けれども愛の思い出は、たとい不幸なる愛の思い出であろうとも、心の中に何ともいえぬ楽しさをのこすものであります。それは苦しみを知らぬ人々の冷淡な気持とはかえがたいものであります。

いざさらば、吾が心を深き墓場の底におけ、

なげくなかれ、吾が心はたとい此の世にて死すとも、

御空の甍もて、屍衣をつくるゆえ

恋人は年老いて萎びても、彼が胸中にしまっていた恋人の面影は、いつ迄も若いのであります。

君が御髪くしはわが胸にいつもかわらぬ黄金色

それ故にこそ彼はゆるすことをしか求めないのであります。

双の眼の思い出に吾は心をゆるすなり

実際彼は赦しています。そして、幸福 Bonheur の中のファウスチュウスが、ステラという名前で、よりよき星の国で姿を変えて見出しているのは疑いもなく彼女であります。あの世で彼を待っているのは彼女であります。

吾を愛したまわずして吾が愛することを知れる君は、

そこにて吾にはじめて微笑み給うらん

私たちはまた彼の詩の中に、彼の青春の魂を揺り動かした宗教的危機の反響を見出すであります。彼は信仰厚き家庭に生まれましたが、この家庭が彼に与えた、他愛のない、よわよわしい信仰は、たえず何故にと自問することを彼に教えて科学的教育によりて、早くから動揺せしめられました。

疑いもなく、科学者の中には信仰を保存しているものもあります。けれども彼等は結局科学者にほかなりません。彼等が讚美する此の広大にして光り輝やく空間の無関心を彼等は憤りません。此の詩人は同情を求めていました。そして彼は科学が彼に示した、この広大無辺なる無感覚な存在に対して不安を感じました。大熊、Grande Ourse という小唄ソネットの中に極めて雄辯に言いあらわされている感じはそれであります。

科学研究をすてた時、彼はリヨンへ行き、不知しらずしらず不識しらずの間に彼に影響を及ぼした神秘的環境の中にはいりました。或る夜、眼をさまして見ると彼はすっかり変身していました。彼は暗い部屋の中へ突然日光を入れたように、彼の魂が光の中に溺れているのを感じました。彼の動揺せる信仰を襲った論拠はそれ以来無力なもののように見えて来ました。彼にはその弱点が何かはわかりませんが、それを知った以上はもはや、歩行者がツェノンの運動不可能の論拠を気にしないと同じように、それを気にしませんでした。

この危機は数ヶ月間つづき、彼は一時説教僧になろうと夢想しました。けれどもパリへ帰って以来蜃気楼は消え去り、ストラウスの著書を読んだために、彼の心中に猶なお残っていた信仰は圧倒されてしまいました。それでも彼の心には、なお、彼がほのかにかいま見た国々のノスタルジイが残っていました。それはちょうどアフリカの中心が旅行者の記録によってしかわからないように、不信家であるとしづかな信仰家であると

を問わず私たちの大部分は、ウイリヤム・ジェームスの書物を通じてしか知らない国々です。いかに屢々しばしば彼はこの消え去った幻像をなつかしんだでしょう！

主よ、主よ、吾おん身を待てり、おん身いずこにおわすや！

双の手を組みあわせ、聖書に額づきて

信條を口ずさめど、あああだなり

吾の前には何者も見えず、恐ろしきかな。

彼はただに最も繊巧なる感情のニュアンスを描いたばかりでなく、長く生きて年古りているために感慨無量ならしむる諸事物の幽鬱な芳香を私たちに感じさせました。事物のもつ魂は私たちがそれに貸し与える魂のみでありますから、それはやさしい魂であります。人間の魂は、真実のところは、私たちには知られざるものであります。この詩人は、実に屢々しばしば互に求めあい、互に結びつかんとあくがれあいながら、無慈悲な障壁に阻まれているこの魂の不可入性をなげきました。

夢想というものは楽しそうに見えますけれども、それは疑いもなく最も苦しき悲観主義へ、彼に誓い Voer や彼方の生、Vie de loi を歌わしめた悲観主義へ導いていったのでした。彼を救ったものは行為の観念であります。彼は自ら行為することはできなかつたけれども、行為の偉大さを理解していました。

彼は屢々しばしば、社会的義務感、働きながら苦しんでいる人たちを思う念になやまされました。それは単なる憐憫からではなくて、怡然いぜんとして不正のお蔭を受けている事を恐れたからであります。

彼と同じ年代の若い人たちと同じように、彼は人道主義的ユトピヤの思想に誘惑せられました。彼は既に

諸国民の協調の実現を信じていたのであります。このかがやかしい未来の光輝にかきけされて祖国の姿は薄暗くなったように見えました。

その時に突如として電光がひらめきました。パリは包囲の恐怖を味ったのであります。この当時シユリイは、ひき続き屢次しほしほの死別の悲しみを味わいました。彼の母と彼がともに生活していた伯父と伯母とは数週間のうちこの世を去りました。かようなつづけさまの打撃は、回復できないほど彼の健康を揺り動かししました。それでも彼は、戦争のはじめから国家のために奉公し、かよいい肉体から、強固な精神がかち得るすべ凡てのものを国家にささげました。

陰惨な戦争の日のあとに、より陰惨な講和の日がつづいて来ました。それはフランスが大なる苦しみをあきらめねばならぬ日でありました。この苦しみは、他日私たちの子孫があきらめるように見えたならば、私たちに二倍もあきらめきれぬであります。

おおこの時彼はどんなに昔日の誤謬を否認したことでしょう。そしてどんなに心いさんで彼は悔悟、*Repentir*を書いたことでしょう。どんなに彼はフランスを愛し、フランスのために死んだ人々を愛したことでしょう？

若しも凡てすべの人が吾が同胞であるならば、

その後の凡てすべの人は吾にとって何であろう！

数年の間彼は新聞を読もうとしませんでした。だが、私たち東国人を驚かせる少しばかりの気持ちのちがいを指摘することを許して下さい。彼にとっては、私たちが引き離されて苦しんでいる同胞（アルサス—ロオレンの民のこと——訳者）の思い出は後方におしやられていたのでした。国家の受けた屈辱の念と、失われた

る偉大さに対する痛惜とが全てをかき消したのです。

けれども彼は憎むまでには到りませんでした。それは祖国というものは単なる利益組合ではなく、高邁な思念の束、狂愚の束でさえあつて、そのために私たちの父祖は闘い且つ苦しんだのだからです。ですから、憎むべきフランスなら、もはやフランスではないのです。

それ故にこそシュリイは次のように書いたのです。

フランス人なればこそ、人間的なる心地すなり、

恐らく今日では、彼は、フランスを裏切れることは人類を裏切れることであると附言する必要があると感じたでしょう。

シュリイ・プリユウドムが哲学詩を公表したのは四十歳のころでありました。他の人が年とってから隠者になるように、彼は年老ってから哲学者になったのだと考えてはなりません。それに反して、彼がリュクレエスの翻訳を執筆したのはクルウゾオの工場につとめているときだったので、それは長く後年まで印刷されなかったのです。

彼は彼よりも前に韻文に於て、彼と同じような問題を取り扱った人たちから、一挙にして頭角を現わしました。実際彼は知識の人であつたのです。彼の良心はあやふやにしか知られていないものについて語ることを許さなかつたでありましょう。あいまいな、不正確な表現をも許さなかつたでありましょう。

然らば彼は、科学詩と哲学詩とを如何にして別々に理解したでしょうか？

科学の勝利は詩を殺すべきものであったでしょうか？ 科学の粗暴な光は、小暗い大樹の蔭にしか咲かない、かよい詩の花を枯死せしめようとしていたのでしょうか？ シュリイはそのようには考えませんでした。彼が欲したのは、昔の詩人の素朴な無知ではなくて、その反対に、未来の詩人の前に開けている、ひろびろとした、光り輝やく地平線であったのです。

未来の詩人は、多くのことを知るならん

若し詩歌に神秘が必要であるとしても、神秘が消え去ることを恐れる必要はありません。神秘はただ後退するばかりです。科学が如何に遠くその征服をおし進めていっても、科学の領域は常に限られているではありません。その境界の全線には神秘がただようています。その境界が遠くなれば遠くなる程神秘は広がってゆくであります。

望遠鏡と顕微鏡とが私たちに開いて見せる極大と極小、物理的法則のかくれたる調和、常に更生し常に変異してゆく生命、それ等は詩人たちの試むるに値いする題材であります。シュリイがとりわけ好んで取り扱ったのはこういう問題ではありません。彼が讚美するのは科学者の精神であります。科学者の忍耐と勇氣とあります。

人間は、真理を征服するために一生懸命になっているとき、一地方を征服する為めに一身を賭しているときに劣らず偉大であります。疑いもなく今日の学者は、もはや、一挙にして自然からその秘密をひき出そうとは希んでいません。彼等は、彼等が一身をささげている仕事は偉大であることは知っていますけれども、それと同時に、それが終末のないものであることも知っています。

吾等ただ一の暗号をかちとらん

一つだつてかまいません、そのような暗号が沢山集つて真理はできあがつているのです。この暗号を得るために、ゼニスのアルゴノオトたちは死に面して一步も退かなかつたのであります。肉はわなわなと恐ろしさにもふるえても、精神がそれを支配し、その理想を追求するために、常に高くへ高くへと肉体をひきずつてゆくのであります。

おお主よ、おん身の意志はなじとて吾を苦しむることぞ、

吾は打ち倒る。——高く、——あわれ、——高くと吾おん身に言い、

吾は砂を吐いて又も新たに跳躍せんとす。

科学詩は、科学にとつて飾り物に過ぎないかも知れませんが、科学詩は、真理を探究している哲学者にとつて、一つの道具となることができません。それは、哲学者が知らんとする実在は、科学者が満足しているような実在ではないからです。哲学者の実在、哲学者の真理は、常に生きており、常に変化し、その各部分は密接に聯結していて、互いに浸透しあつていようような観を呈し、それを引き離そうとすれば、それを破り裂かなければならぬようになっていきます。科学者の実在は像イマージュに外なりません。それはすべての像と同じく不動であり、死んでいきます。否むしろそれは、石を巧みに並べてあるモザイクです。けれどもただ並べてあるだけです。疑いもなく、私たちの知り得るものはこの像だけなのです。何故なら、私たちは私たちの理解力に準じてそれをつくつたのだからです。

けれども、哲学者はそれを思考してしまふと、彼は別のものを要求します。こんな風にして彼が感ずるも

のを、どうして彼は言いあらわすでしょうか？ 散文の言葉は、科学の言葉のようなものであって、一度び定義されると、不変の、はつきりと輪劃のついたものを代表することしかできません。詩歌は音楽と同じように、はてしなき夢をよびさます特権をもっています。一つ一つの音譜は私たちの心に何の感動も与えませんが、それ等が一つのメロディに結合されると、音楽的詩句の律動が、それ等に生命を与えるように、私たちに此の上ない深い感動を与えます。

一つの韻文に集められた単語はそれと同じような神秘的な力をもっています。一つ一つの単語は、ただその語に固有の意味しかもっていませんけれども、それが一つに集められると、ちょうど水の表面に石を投げたときに起る波紋のように、多くの像が、次から次へと無限に起つて来るようになります。これ等の波動は、すべて、生ける實在の諸要素と同じように、互いに淆融し、互に浸透しあっています。さればこそ、哲学詩はこの實在の甚だ完全なる姿を私たちに与えることができるのであります。

けれども、此の詩には、それが深遠なものであること自体から生ずる一の缺点があります。一つ一つの言葉が長い思索を要します。精神は詩人の飛躍にひきづられてそれについてゆこうとしますが、一步一步につまづいて地上に倒れてしまします。二度読みなすと、苦しい感じは弱まりますけれども、私たちが一篇の詩を暗誦しはじめる位になつて、はじめて私たちの愉快はまじりけのないものになるのであります。

哲学詩は古くから光輝ある歴史をもっています。私たちは、少しく霧のかかったパルメニドの時代まで溯る必要はありません。リュクレエスの方がより私たちの時代に近いけれども矢張り相当古代の人です。この時代には哲学はまだ幼稚で、自信に満ちていました。そして、子供のようになつて、ちよつとした光を認めても、それですつかり魅惑されました。リュクレエスは、世界は神々の氣紛れに従っているのではなくて、不変の法

則、何かは知らないが偉大なる盲目的な調和に支配されているのを見ました。この新奇な光景は、彼を驚歎させ、彼の眼に自然の姿を一変せしめました。多くの空想的恐怖からのがれて、彼は自由にほっと息をすることができるような気がしました。

不思議なことではありますが、当時の有識者たちにとっては、リュクレエスは人類の恩人であったのです。その後になって、キリストが私たちに不滅のものを与えたとき、それは良きたよりであると言われました。そして更に近代になって、十八世紀の哲学者たちは解放者として迎えられたのであります。

リュクレエスは師に対する感謝の念に充たされて人々に救いの言葉を齎もたらそうと欲し、喜び勇んで、伝道のために出発しました。私たちを感動せしめるもの、彼の詩に力あらしめているものはこの熱情であります。今日では、現代の詩を悲劇的ならしめているのは、内部の戦であり、懐疑であります。戦はもはや外に行われているのではなくて、内に行われているのであります。

シュライは、どうして彼が「物の本性」の第一巻を翻訳するようになったかについて、私たちに次の如く語りました。『この翻訳は、すっかりした、はっきりした考えをもった詩人たちに、韻文を思想にしたがえる秘訣をたずねるために、ほんの練習としてやって見たものである。』して見れば、彼は道具を鍛えようと欲したので。そしてこの道具は、私たちに、運命、Destins、正義、Justice、幸福、Bonheur 等の詩を与えたのであります。世界は善であるか或は悪であるか？ それとも樂觀主義者も悲觀主義者も同じ幻想にあざむかれているのであるか？ これが、彼の最初の哲学詩運命に於て課せられている問題であります。

シュライ・プリウドムは、善の精と悪の精とが、それぞれ、自分の計画に従って世界をつくろうとし、前者はできるだけ善き世界を後者はできるだけ悪き世界をつくろうとして苦心しているさまを私たちに示して

います。けれども善は悪との対照に於てしか存せず、悪は善との対照に於てしか存しないので、二つの計画はすっかり同じものになつてしまつたのです。

よくつくられた言語に於ては、幸福という言葉と不幸という言葉とは原級も、最上級もあつてはならぬのであります。ただ比較級のみがあるべきです。そして恐らく凡ての形容詞はそうあるべきであります。この二つの精は、人間をつくり出すときに及んで明らかに誤つたのです。彼等は、人間に別の魂を与えることによつて、即ち、凡ての善に従うべく、或は凡ての悪に馴れるべくもつとそわそわしない、もつと尊大でない、もつと忘れることのおそい魂を与えることによつて困難を切り抜けることができたであります。だが恐らく、彼等に忠告を与えるにはもうおそすぎるであります。

第二の哲学詩に於ては、この思想家は正義を求めていきます。正義の神によりて創造せられたと言われているこの自然界に於て、彼は種と種との間の、国家と国家との間の、或は国家内の、市民と市民との無慈悲な争闘のみしか見出しません。地上至るところで、征服者は正義を蔑ろにしています。では他の天体に於てはどうでしょうか？ 疑いもなく、星の世界は遠くから眺められているために得をしています。

かわらぬものは人間の良心のみであります。そして正義の観念の唯一の避難所は人間の良心のみであります。それは恐らくいつかは勝利を博するでありましょう。けれども、人間の来たのはあまりに早すぎたか或はあまりに遅すぎたのです。そのために、人間は永久に流竄るぞんされているように感ずるのであります。それでも人間をつくつたものは自然であります。自然は一日たりともその無私公平なる道義を忘れたでしょうか？ 自然はライオンに食肉獣に有用なる残忍性を与えたように、人間には社会的に生活してゆかねばならぬ種の保存に必要な道徳的意識を与えたのであります。

此の意味に於て、この良心の渴仰は、自然の神秘なる計画と一致しているのであります。この詩人はかような説明で満足し、苦惱から救われて歓喜の詩をうたっています。おそらくそれはあまりに早まり過ぎたではありません。何故なら、真の問題、最も苦しい問題にはまだ触れていないからです。どこに正義があるかを見わたることができましょうか？ 私たちは或る一面に於て不正ならざる正義を考えることができるでしょうか？

正義のつぎに詩人は幸福を探求します。この幸福こそは、人々がたえず要求しているものであります。幸福こそは人々がのぞむことのできないものであります。文明の進歩は人々に幸福を与えることができるでしょうか？ 人は、人間が働くのは幸福のためであると信じさせようとしていますし、こうした幻想は必要ではありませんが、しかしそれは幻想です。人間は幸福ならんがために働くのではなくて、強からんがために働くのです。そして強からんがためには非常にしばしば自己の幸福を犠牲にします。かつて人間は、楽しい遊牧生活をすててつらい土地の労働につきました。人間はひろびろとした土地に於ける長い夢を何の未練もなくすてたと考えられるでしょうか？ だが、彼は是非そうしなければならなかったのです。何故なら豊沃な耕作は大なる軍隊を養うからです。その後人間は田野の自由な空気をすてて、狭隘な工場に入らねばなりません。それは、力を与える鋼鉄をつくるには竈たちまがいったからです。万一、或る国民が強いて幸福をえらんだらば、もつと抜目のない隣国は、忽ちこの国民を自由に掠奪してしまふであります。

地上に於いてかくもみじめなる人間は、どこか遠くの星の世界に於て幸福をのぞむことができるでしょうか？ そのためには、人間は魂をかえねばならぬでしょう。彼には天使の魂か獣の魂が必要になるでしょう。詩集エ、パーヴ、Epavesの中に次の句があります、

別のものとならざれば幸福を享樂し得ざらん

されど別のものとなりて幸福を何にかせん

ファウスチユスとステラとは死後、幸福な星の世界で邂逅かいこうしました。この世界には詩人の想像の及ぶかぎりの調和と美とが積み重ねられていました。しからばそれは幸福であったでしょうか？ 否、人間は戦をやめてしまえば生き甲斐なく感ずるのです。彼はこの活動もなく、情緒も起らない幸福には倦きてしまうであります。この詩の中に、そのことを最もよく云いあらわしているように思われる一つの挿話があります。ステラは歌いはじめましたが、その声はもはや地上のものではありませんでした。

なげきもなく……

慄いもなく……

嗚咽もなし……

だが、なげきも、ふるいも、嗚咽もなき音楽とは一体何でしょうか！

疑いもなくこの二人は地上の思い出をもたなければ、すぐに倦怠を感じたではありません。けれども、この思い出そのものが苦しみなのです。そこではまだ不幸な人たちが苦しんでいるのです。敏感な魂は、すぐそばに地獄のあるような極樂を考えることはできません、かような極樂を喜ぶことのできるような人々、正義に恵まれている人たちは、そこへはいる価値がないのです。ファウスチユスとステラとは地上へ帰ろうと決心しましたが、彼等が着いた時はもう既に遅すぎました。人類はもはやいかなかったのです。けれども、こ

の空しき犠牲の美しさは、彼等が如何なる極樂からも期待することのできなかつたものを彼等に与えたのであります。

かようにして、シュリイは、私たちが既に彼の青年時代の日記に見出した、犠牲による幸福の思想を美しき詩にうつしたのであります。

一八八九年以来、シュリイ・プリユウドムはもはや詩を発表しませんでした。詩を書くことはやめませんでした。形而上学の問題が彼をなやまし、彼はそれに凡てをささげようとしたのです。

彼は或る青年に向つて次の如く書き送りました。『人智の限られた限界を知ったならば、無智に安住するのが最も容易である。そうすれば、空の星をはずしてとることができぬことを苦しまなくてもよいように、最高真理に達することができないことを苦しまなくてもよい』。彼はこの忠告を与えることはできませんでした。彼自身はそれに従いませんでした。何故なら、彼は詩人であつたからです。そして詩人こそ正に星をとりはずそうとして苦しむ人たちだからです。

彼は懐疑家ではありませんでしたが、彼の最後の著書の標題は、吾何をか知る？ *Que sais-je?* という標題です。吾何をか知る？ 凡ての思想家が最後にはこう言いますが、彼等の道は如何に千差万別であることでしょうか？ モンテエニユは、吾何事をも知らずとは敢えて言つていません。そういえば一の断定になりますから、吾何をか知ると言う方が彼には一層用心ぶかいように思われるのです。シュリイが、吾何事をも知らずと言うことを欲しないのは、あまりに軽率に無力の告白をすることは、彼には殆んど捨鉢のように思われるので、彼の全精神がそれに抗議するからです。

彼の哲学説は何であつたでしょうか？ 彼は唯物論者でもなく、そうかといって精神主義者でもないと自分

で言っています。彼は、はじめに、外界の存在について同意を求めているから観念論者ではありません。けれどもまた彼はほんとうの实在論者でもありません。何故なら彼は实在論というものが妙なものであることを理解していたからです。彼はまた実証論者でもありませんでした。彼は平気で『宇宙の絶対的形而上学がある』と書いています。だがもうこの辺でやめましょう。哲学の字彙には、何々論者と綴れる言葉があまりに沢山あるので、この無限に多くの言葉に私は閉口してしまっています。

私たちは、彼が凡ての分類を嫌がってもあまり驚きません。眞の哲学者の魂は一の職場であります。それはただ一人の君主の席しかない平和な君主国ではありません。この職場に於ける交戦者は何者でしょうか？一方は、氣むづかしい、頑固な理性であり、他方は如何なる論拠にも服しない心の憧憬であり、深い本能であります。それはカントの言ったように、純粹理性と実践理性とであります。

この職に於ては、純粹理性は前もって征服されています。私たちの本能は私たち自身です。ですから、私たちが、多少本能の肩をもつて、本能の本へ秤をかたむけるは自然であります。そこで、純粹理性は、その無慈悲な分析に於て、忽ち矛盾に遭遇します。その敵手も亦矛盾に遭遇するのですが、この方はそれを意に介しません。ところが、理性の構成に於ては矛盾は致命的です。ここに於て私たちは、理性が私たちにひらいて見せるように思われる世界の純然たる外観だけしか見ないようになり、従つて戦場は、私たちに情操或は幻想を与えるところの憧憬、或は実践理性の天下となり、それは私たちを宇宙の生命に参与せしめることによつて、私たちに宇宙の何物かを啓示するのであります。

哲学者たちが互に異るのは、わけても、彼等の実践理性の解しかたによります。カントにとつては、それは不撓の道德であります。新教の教理問答のような少々乾燥な道德であります。シュライ・プリュウドムに

とつては、芸術と美とに対する愛が、正義よりも憐れみをむねとする道徳的善と結合しているやさしい真心の混融状態であります。それは彼にとつては現実世界の反映であります。彼は、蒼空の中には、学者がそれによつて蒼空を説明するような細かい塵埃じんあい以外の別のものがあるのを感じます。そして、そのことは、幻想ではなくて、彼の憧憬しんきやうけい、進化を生じ、宇宙をつくるこの恐らく盲目的な力のうちに、彼が認識していると信ずることだと彼に希ませたのであります。

しかも、どうしても彼は平和を見出しませんでした。この彼の憧憬しんきやうけいの世界は、光り輝いてはいるが、変化常なき、多様な詩人の世界だったのです。それはカントの世界のように輪郭のくつきりとした干乾ひからびた世界ではなかつたのです。

私たちの心を最も動かすところの不死の問題については、彼は希望を失っていました。そして

青も黒もすべて美うらわしく愛らしし

墓の彼方には

はてしなき黎明あり

眼を閉ずともなお見ゆるなり

と言つた彼は今や『やがて吾考うることなき時来らん』と書いているのであります。

或る神学者たちの輪廻りんね説は彼を恐怖せしめました。神に人間の魂を与えることは神に責任のある魂を与えることになり、神をとがむるに宇宙にある凡ゆる悪をもつてすることになります。けれども、詩人は輪廻りんね論者に外なりません。何故なら彼には像が必要だからです。ここに於て詩人と哲学者との間に勝敗のつか

ぬ職が行われます。『神とは吾に理解し得ざるものなり』と彼は叫びましたが、それでも彼は神を求めました。

無限にうちひしがれ

望みなくひれ伏して

無気味なる沈黙のうちに

解きがたき宇宙をおもう。

額は重く、胸は裂かれ、

知ること多ければ悲しみいよまさり、

最後の殿堂の階段に、

ひざまづきてなおも泣く。

パスカルが言ったように、神を求めることは既に神を見出したことであります。シュリイの母が、すっかり氣を揉んで、ガストン・パリスに向い、『^{せがれ}伴の書いた書物には神様に逆らうようなことは何も書いてありませんか、どうぞ言つて下さい』と言ったときに、彼は次のように答えましたが、その答えは正しかったのです。『奥さん、御息さんの書物には、不信心な言葉や考えは一つもありません。あの詩はみんな、神に背を向けるどころか、たえず益々熱心な益々信仰深い努力をもつて神を求めている詩であることを誓つて申し上げます。』

パスカルは私たちにとつて一つの疑問であります。思想家のうちに、此の疑問になやまされなかつた人はほとんどありません。パスカルが彼と同じ苦しみを知っていたこの詩人哲学者の心を惹かなかつたら驚くべ

きことであつたでしょう。一八六二年にシュリイは彼の日記に次のように書きました。

『パスカルよ、私はあなたを讚美する。あなたは私のものだ。私はあなたの中へ没入しています。まるであなたの中で考えているように、大いなる悲しみ、深き、深き、夜の如く潔き、夜の如く遙かなる微光に満ちた悲しみ。私の先生となつて下さい。私をあなたのものにして下さい。私は無限に苦しんでいます。私は真理のまわりにひきつけられているのですが、いつまでも真理には達しません。』

その後パスカルの名は初期のかずかずの詩に、幸福の中の詩に、屢々見出されます。ファウスチユスをはじめ、彼を慰さめに出てくるのも矢張りパスカルです。最後に、彼の脳裏にしばしば現れたパスカルの姿は、シュリイをして、非常に探索的な一書を書かしています。その書物の中で、彼はパスカルの計画を再建しようとし、感想録 *Pensées* の順序を補修しようとしています。

パスカルの魂は、彼にとっては心惹かるる神秘でありました。何となれば、それは不思議にも彼の魂と似ており、同時に甚だしく彼の魂と異つていたからであります。それは、やはり冷静なる理性と心情の憧憬との争闘でありました。けれども、この憧憬は、極めて情熱的な、極めて激越な、極めてのつびきならぬ、そして就中極めて無慈悲なものであります。パスカルはやさしいよりも多く熱情的でありました。彼が奔放な慈心に驅られて愛したのは人類ではなくて、専ら、イエス・キリストの聖体の各部即ちキリスト教徒徒でありました。又彼は、凡ての苦しめるものに対して寛容と憐憫とに満ちた、やさしい心を尻ごみさせるジャンセニスムの狂暴な神をも、平気でうけ入れました。

シュリイは美的憧憬と道德的憧憬とを別々に引きはなしませんでした。芸術に於ける審美感とは自然に於ける審美感と同じく彼には眞の神性の啓示のよう見え、その発言はどんなものでも彼には無関心ではありま

せんでした。最も繊細なるもの、最もかよわきもの、最も細微なるものが、彼には、最も貴重なるもののように見えました。パスカルを圧倒したものの、彼が専らその讚美の念、一種の畏敬の念をもっていたものは、それとは無限に反したものでありました。この畏敬の念は彼をやさしく天へ惹きつけるかわりに、彼を惨酷にも虚無へつき返し、超自然的な神寵のみがそこから彼をすくい出すことができたのであります。それは何という類似であり、しかも何という対照でありましょう！

長い戦の後、パスカルは一の平和を見出しましたが、シュリイ・プリユウドムは決して平和を知りませんでした。パスカルが直接にアブラハム、イザーク、ヤコブの神の存在を感知した一六五四年の夜のことを詩人が私たちに語ったときに、彼は、彼自身がリヨンで、同じように明らかにかがやいてはいるが、一層逃げ易い光に侵入された夜のことを思い出していたに相違ありません。そしてこの思い出は彼に哀惜の思いをよびましたのであります。

彼は言いました。『ああ、彼の運命は、その苦しみにもかまわずに、彼に劣らず、真理と正義と愛とに飢え、それ等に飽くのをぞみを失える人々をどんなにひきつけることができただろう。』けれども彼はこの哀惜に身をまかせてしまいませんでした。彼は人間はどんなことがあっても『眠っていて、信じているのだと夢想することを快しとすること』はできぬということを理解していました。理性をすてることは彼の眼には墮落であるように見えました。そして彼は、永久に自己に休息を知らせないようにしました。彼は、彼の魂の中で争っている二つの力の一つを犠牲にすることによりて自己を小さくしようとは欲しませんでした。

理性には限界があります。それは相対的なものしか知ることができません。それでも理性は自己の領土に於ては主権者であります。パスカルの信仰は、彼に他の多くの犠牲を要求しました。シュリイはそれに満足

しようとは欲しませんでした。独断的教義の精細な分析によりて、彼は、これ等の教義は、ただに私たちの欺かれた理知にとつての始末におえない神秘であるのみならず、それは矛盾しているために無意味であることを認識したと信じました。そして彼はパスカルがわざと眼かくししていたのでないとすれば、どうしてこの真理を彼が見逃したかをあやしみました。彼が地球の運動の問題や、聖書に書いてあることの真偽の問題に触れなかつたのは、彼があまりに多く知ることを怖れたためだったでしょうか？ かかる見解から、何としても驚くべき判断が生じました。『パスカルは英雄ではない。』これが、此の著書の真の結論だったのでしょうか？ 疑いもなく、否、何故なら、此の書物の全体の統一を損うことなしに、別の文句を引き出すことができるからです。次の如き最後の叫びにおわっている文句には、同情の跳躍以外に何物も、のこっていないのであります。『此世に於ては、愛のために我欲を犠牲にして善をなし、彼の世に於ては神そのものとなりて蘇る。何たる報償ぞ、何たる夢想ぞ！』

シュリイ・プリユウドムは単なる素人アマチュアルとして美術を觀賞したのではありません。彼は好んでモデルをつくりました。彼は、彼の母や友人たちの省像をあらわした小さいメダルをのこしました。又私たちは彼がイタリヤ及びオランダを旅行したとき、鉛筆若しくはペンで、彼が訪れた美術館の絵の中で彼の心を打った作品を素描した写生帖をもっています。そこには、表現のうまみと、若干の技術的精巧じやっかんとが見出されます。それにひきかへ彼は音楽家ではなかつたということです。それでも苦悶、Agonieを書き、幸福の中の忘れることのできない詩句を書いたのは彼であつたのです。

けれども、彼は、彼が感じたものについて反省を加えなかつたことはありませんでした。彼は彼の肖像画を描いた画家に、たえずどうしてちよつとした刷毛はけさばきや、見わけ難い位の線の加減で表情や相貌がひど

くかわってくるのであろうかとたずねました。美に対してかくも敏感であり、かくも理解せんとする欲望の熾烈であつた彼が審美理論をのこしたことはあやしむに足りません。

芸術作品が私たちにひきおこす快感に、彼は二つの要素を区別していません。色彩又は音響が純粹にして且つ調和的に結合されている時に感官に歡喜を生ぜしめることがなかつたならば、眞の美はないでありましよう。それ故に、少くもすぐれた感官をもたない人は芸術家ではありません。けれども、芸術はこの美妙なる肉体的快樂につきるものではありません。芸術の眞の目的は表現であります。芸術作品は、何かしら神秘的な共感によりて、芸術家の魂の中の或るものと、私たちの粗雑な眼だけでは見わけることのできないモデルの中の隠されたる性質即ちその内部にひそむ精髓とを、同時に私たちにあらわして見せます。

表現は或は客觀的であり、或は主觀的であることができます。實際或るときは、現実に自然に存在するものを再生しようとするし、或るときは、私たちの想像力が人間の欲望をもって生かしている対象についての感じを起させることだけに限ります。

ここに於て、一見驚くべき美術の分類が生ずるのであります。何故なら、この分類は、建築と音楽とは、いづれも画家や彫刻家に課せられるようなモデルをうつすものでなく、主觀的表現しか知らず、私たちに限りなき夢想の自由をのこすものであるから、この二つを接近させます。

私たちの觀念は、習性によりてつくられた美妙な連鎖によりて互にむすびつけられています。これ等の觀念は互に相呼応し、氣紛れに見える外觀の下に不撓の訓練をかくしている一定の順序に従つて継起します。芸術家は舞踊ダンスを起さしめる觀念を揺り動かすことができます。するとまもなく凡すべての觀念がそれにつづき、やがて魂全体が波を起して、その波は凡あらゆる方向に交錯します。

この動揺はそれと結びついているように思われる美的情緒をよびおこし、人間はあだかも、心臓の鼓動の高鳴りを感じつつ自己を超越するようになります。かような情緒は、疑いもなく、魂が人生の種々の出来事によって動かされる時にも生じて来ますけれども、その時には、はげしい欲情によっておおいかくされていって認知されません。これに反して芸術作品が私たちによびさますような柔かな刺戟に面するとき、かかる情緒は無比であります。

シュリイは、彼自身がおさめた芸術、即ち詩歌を忘れることができませんでした。詩歌についても彼は反省しました。彼は伝統的韻文法を忠実にまもり、その諸規則を理性によりて巧みに正当化しようとし、それに成功しました。彼は有名な若干の新規則の中のある人為的なもの偽りのものを明らかにしました。

彼はあまりに不羈独立の詩作者たちに、彼等に一人の先駆者があつたことを想起せしめました。それはシャトオブリアンであつて、彼の書いた文章は調和ある文章であつたから、若し彼が屢々詩をつくっていたら、彼等を凌駕していただでありましょう。

今日では疑いもなく彼の考えを時代遅れな考えであると見なしている若い詩人たちがあります。一八九五年にガストン・パリスによりて書かれた立派な評伝を彼等に回想してほしいと私は思います。わけても、巻末の部分、パリスが、その当時に於て既にシュリイ・プリユウドムを時代遅れであるとして非難した人々に對して彼の友を辯護した部分をよく静思してほしいと思います。今日彼が時代遅れであることを証明しようとする人たちは、新しい人々であり、彼等は新しい論拠によりて彼を非難しておるのでありますけれども、往時の彼の非謗者たちは、十五年もたたぬうちにすっかり忘れられてしまったのであります。

彼の詩は、甚だフランス的香氣の高いものでありましたが、外国でも賞讃され、はじめてノobel文学賞

が与えられたときに、彼は受賞者に選ばれたのでありました。新聞記者たちは視聽をあつめました。賞の価値、恐らくその精神的価値よりもその金銭的価値は公衆の注意をひき、彼の名誉を、彼の詩によっては動かされなかつた底の方の層にまでもしみわたらせました。ヨオロッパは弗ドルの崇拜はアメリカの宗教であると思われていますが、それはヨオロッパの自惚うぬぼれです。彼がこの賞金を如何いかに尊く消費したかは周知のことではありません。思いもかけずころがりこんだ福の神は彼には不当の所得のように、それを少しでも私用することを恥としてであります。

遂に老年が来ました。苦しみ多かりし若き日に、彼はほとんど老年をまちこがれていたのです。

年こそ来れ、救いの年の待ち遠しき哉

脉管みやくを流るる血潮もさかしくなり

快樂も吾にとつて魅力を失い

しずかに年老りし苦痛とともに吾は生きん

吾が生涯の峯に坐して

悩みなき生を眺めばや

山頂にたちて河と路との

うねるを見るときに如くに

その頃彼が希ねがった願望のうちで一つだけはかなくなりました。

心ゆくまで温情を味わわんかな、

彼がこれ程までに希^{ねが}つた老年が彼にとってどんなものであったかは諸君の御承知のとおりであります。ひきつづきて絶えまなき苦しみ、肉体の衰え、しかもこの衰弱の上に、毅然として彼の理知は曇らず明光を放ち、彼の魂はびくともしませんでした。幸いにも、用心深い心づくしによりて和らげられたこの苦しみは、彼の精力を打ちひしぐことなく十年間つづきました。彼は仕事によつて苦しみを忘れようと思いました。彼が聖トマス・ダカンの『眠り』を熱読したのはこの頃でありました。この読書は、彼に次の如^{ごと}き考えを起させました。

『何という複雑さであろう！ あんなに単純な福音書から、どうしてこんなものが生じ得たのであろう！』

又彼はこの苦しみを友情によつて忘れようと思いました。彼の友人たちのために、彼はもう一度昔の人間になろうとつとめました。彼のやさしい眼の光が、彼の容貌に一瞬の間の若さを与えた時のほかは彼の容貌は年老いて見えませんでした。けれども彼は、彼を愛した人たちのために強いて快活に見せかけようとつとめました。彼は苦しんでいては醜いことであろうと心配して、彼等に醜さを見せまいために、モルヒネを飲んで微笑する力を得ようとしたのであります。

けれども私は彼が死を冀^{こゝろが}うていたと言おうとは欲しません。彼は死を詮らめたのです。彼は十分の希望をもつていませんでしたが、平静に死の虚無に面することはできませんでした。それは、彼は哲学者ではありませんでしたが、詩人の想像がむらがり起つて来たからです。この虚無は眠りではなくて、単なる夜であつたからです。

けれども遂に死は来しました。そして死とともに救いが来しました。彼はそれを待つていたのです。彼は苦悶なしにそれを眺めることはできませんでした。何故なら、彼の魂は不安にさいなまれていたからです。けれども彼はそれをまともに眺めたのであります。

- ポアンカレ著・平林初之輔訳『科学者と詩人』（岩波書店、岩波文庫、昭和二十一年第十二刷）所収。
- 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に、旧かなは新かなに変更し、適宜振り仮名をつけた。ただし、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- PDF化には \LaTeX 2 ϵ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。